

文学研究論集

第47号 2017. 9

## 居心地の良いすぎる東京郊外の地元暮らし

Comfortable life of young generation living at home of  
Suburban Tokyo

博士前期課程 地理学専攻 2017年度入学

小 林 直 弘

KOBAYASHI Naohiro

## 【論文要旨】

本稿は、「マイルドヤンキー」に代表される地元に残る若者たちを対象とした生活実態調査に基づいている。彼らは地方出身の親を持つ「郊外第二世代」と、地元出身の親を持つ「地元の若者」とに分けられる。「地元の若者」に注目すれば、彼らの人生の糧である絆意識や毎日の平凡な生活は、ブランド品のユニフォーム化と「場めん」習慣に象徴される。都心で高級ブランド品を購入し、それをグループのユニフォームのように身にまとうブランド品のユニフォーム化を通じ、彼らはグループ内や地元の人間関係において自分の居場所を確立する。この習慣は実家で暮らしながら過酷な就労環境の下で高額な給与を得ることにより成り立つ。また夜中に「いつもの場所」へ即興的に集まる「場めん」習慣を通じ、彼らはグループメンバーの帰属意識を確かめあう。この習慣は深夜の集合時間と自動車移動という、メンバーの不安定な終業時間への工夫に特徴付けられる。これらの特徴的な行動は、親の世代から受け継がれると推測される地元での豊かな人間関係を前提としており、「郊外第二世代」とは異なる存在として彼らの地域貢献への可能性は再認識されるべきである。

【キーワード】 過剰包摂, 郊外第二世代, 実家暮らし, 地元, マイルドヤンキー

## 1 はじめに

日本では高度経済成長期を中心に、地方から大都市圏への顕著な人口移動が見られた。この人口移動は結果的に大都市圏の郊外化を進めた。「団塊の世代」や「郊外第一世代」と称される流入人口は大都市圏の大学へ進学し、就職や結婚などのライフイベントを経験した後、郊外に定住すると

いうライフコースを辿り、主に鉄道沿線に形成された「職」「住」の分離する郊外の拡大に貢献した（谷 2007）。

1970年代後半から郊外都市における小売業・飲食業などの立地が目立ち始め、郊外に住む主婦を中心とした非正規雇用が増加した（富田 1993, 古郡 1997）。1990年代のバブル崩壊以降は、就職氷河期の影響で「団塊ジュニア世代」や「郊外第二世代」と称される若者たちがフリーターとして働き（小杉・堀 2002）、低学歴の若者の中には学校体験での失敗を背景に、自分の「やりたいこと」を優先しフリーターを志願するような者も現れた（新谷 2002）。彼らは最寄り駅前や近くの郊外都市へ通勤するため、通勤圏が正社員よりも狭く（稲垣 2002）、一人暮らしをする際も親の近くに住む「近居」という居住スタイルを選ぶ傾向があるため、生活圏は狭い（稲垣 2011）。この結果「郊外核」と称される「住」「職」の隣接する完結した郊外空間が形成された。

このような完結した空間性は、もともと地方都市において顕著であった。大都市圏へのアクセスが不便であることに加え、1980年代以降のロードサイドショッピングモールの登場による消費空間の充実、地方都市の完結性を促進させた（阿部 2013）。この完結性における郊外と地方都市の類似を川口（1990）は「郊外の地方都市化」と称した。さらに、そのような完結した空間内で暮らす「郊外第二世代」の生活圏は父母に比べ狭い領域に収まると予見した。

そのような狭域な生活圏を持つ存在として、「マイルドヤンキー」<sup>1</sup>という若者層が注目されている。「マイルドヤンキー」とは「上『京』志向がなく、地元で頑固な人間関係と生活基盤を構築し、地元を出たがらない若者たち」（原田 2014：25）のことである。この言葉は、博報堂若者研究所の原田耀平による造語で、2014年に流行語大賞へノミネートされるなど、メディアで頻繁に取り上げられた<sup>2</sup>。彼らの特徴として、低い上昇志向、半径5キロに収まる狭い日常生活圏、ロードサイドショッピングモールや総合ディスカウントショップにおける旺盛な消費意欲、中学校時代からの友人関係を中心とした狭い人間関係、そして「生まれ育った土地に根ざした同年代の友人たちと、そこで育まれてきた絆意識、家族と地域を基盤とした毎日の平凡な生活」（原田 2014：25）を何よりも大切に生き方が挙げられる。

地方都市における「マイルドヤンキー」の生活実態は雑誌や記事で数多く取り上げられる。たとえば、中学生時代の友人たちと溪流釣りなどを楽しみいつまでも変わらない日常に幸せを見出す若者、またそのようなライフスタイルを SNS を通じて確認し、当時のつながりを求めて都会から U ターンする若者<sup>3</sup>の姿がそこでは語られる。さらには、地方都市のロードサイドに林立するカラオ

---

<sup>1</sup> 「マイルドヤンキー」という言葉の由来は従来の「ヤンキー」のように強面だが礼儀正しく優しいという特徴と関係している（原田 2014）。また「ヤンキー」という言葉に関しては1970年代初め米兵の遊び着スタイルにルーツを持つファッションを、アメリカ人を意味する「Yankee」という言葉を使い示したことが由来である（難波 2007）。

<sup>2</sup> 「対論『マイルドヤンキーの出現』」（読売新聞2014年9月1日東京朝刊）

<sup>3</sup> 「都会より 地元ラブ U ターン男32歳」（読売新聞2014年5月4日大阪朝刊）

ケやファミリーレストランを舞台とした携帯小説が地元志向型若者文化として紹介されている<sup>4</sup>。彼らを解釈する際、まず次世代の町内会長、あるいは地方活性化の担い手として捉えられる。一方で、非正規雇用などの不安定な雇用形態が増加したことを受け、大都市圏で職を見つける気力を失った若者であるとの指摘もある（樋口 2004）。また、地元志向の若者像を戦後の高度経済成長期と比較したうえで、1960年代の若者の都心集中を特異な現象とみなし、現代の地元を志向する若者たちは「普通」で、さらにいえば「元々の日本の価値観」に従った生き方との指摘もある<sup>5</sup>。既存研究において阿部（2013）は地方都市に住む彼らを「地方にこもる若者たち」と称し、家族関係と友人関係という狭い人間関係を何よりも大切にする若者の生活実態を明らかにした。また轡田（2011, 2017）は若者が地方に残る理由を「絆」「つながり」という精神的な側面と「金銭」などの経済的側面から捉え、彼らの分類を試みた。その中でも「社会的排除の結果としての包摂」という範疇に分類される若者は、親と同居することで得られる経済的な援助（ニューマン 2013）に頼らざるを得ず、その背景には地方都市における正社員雇用率の低さや（太田 2005）、自営業の衰退、さらには従来において、学校空間から排除された若者を包摂していた「族」文化の解体などが挙げられる（阿部 2011）。

東京大都市圏郊外の「マイルドヤンキー」も同様に、武蔵小杉や石神井などの地域において、いつまでも中学時代の友人たちとの「つながり」を重視する生活実態が報告されている（原田 2014）。新谷（2007）は深夜時間帯に大都市圏郊外の駅前でストリートダンスを踊る若者の集団行動を「地元つながり文化」と称し、学校や社会などのパブリックな文化とは対照的な生活習慣と説明した。「地元つながり文化」とは、主に中学時代の人間関係で構成されたインフォーマルな共同の関係で、それは職業的な達成よりも優先される。またこのような集団は、都心において出身地が多様な若者が流動的に形成する「都市下層」と称される集団とは異なり、高い帰属意識と特定の「地元」出身率の高さが特徴として挙げられる（田中 2016）。そして、視野を彼らの親世代まで広げた場合、「郊外第二世代」と一括りにされがちな大都市圏郊外に住む若者たちは、地方から移り住んだ親を持つ「郊外第二世代」と、郊外とされる地域で生まれ育った親を持つ若者たちとに分類できる。今回の研究では、後者を「地元の若者」と称す。「マイルドヤンキー」は地元に残る若者たちの様相や行動特徴に着目して生み出された範疇であるため、上記した「郊外第二世代」と「地元の若者」たちが混在している可能性が高い。

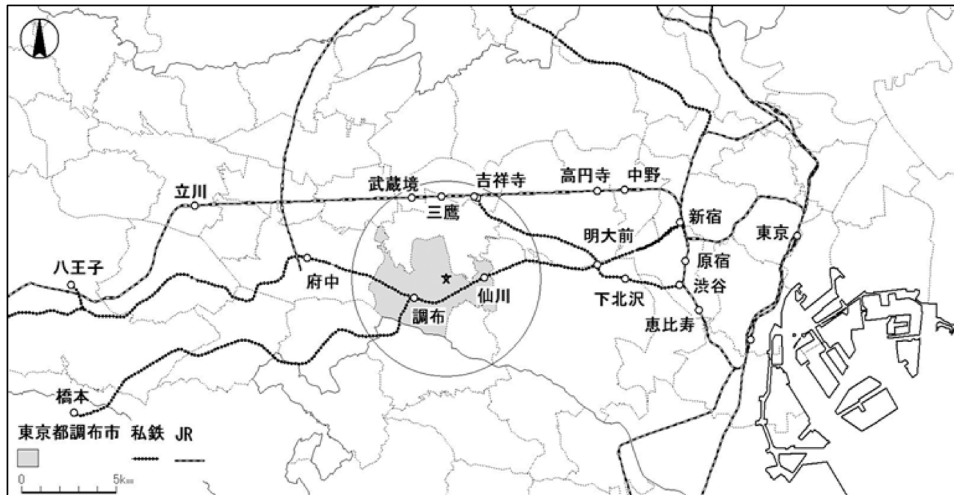
このように、若者の生活実態を広い視点から捉えた研究には、地方都市をフィールドとしたもの（阿部 2011, 2013, 轡田 2011, 2017）が多く、大都市圏郊外における研究は少ない。大都市圏郊外に住む若者を対象とした研究には、インフォーマントの特異な行動を現象として記述することを目的とする研究（新谷 2007, 原田 2014）が多いのだが、若者の生活実態を解釈する際には、

---

<sup>4</sup> 「〈異見新言〉若者の地元志向 消えた東京へのあこがれ」（毎日新聞2008年12月20日朝刊）

<sup>5</sup> 「対論『マイルドヤンキーの出現』」（読売新聞2014年9月1日東京朝刊）

第1図 対象フィールド（筆者作成）



\*出身中学を中心とした半径5キロの円。

そのような特異な行動を彼らの生活構造の中で局部として捉えなおし、生活の全体像の把握を試みる必要がある。

以上のことを踏まえ本研究の目的は、東京郊外において地元を志向する若者の生活の全体像を「仕事」「親」「余暇」という3つの側面から確認し、絆意識や友人関係などの情緒的連帯が反映された習慣や行動をエスノグラフィー<sup>6</sup>的に記述した上で、それらを生活全体の中で構造的に位置づけることである。調査対象者は東京都調布市のある公立中学校出身者で実家に在住、もしくは実家から半径5キロ圏内で暮らす中学卒業9年目（2016年度24歳）の者たちである。したがって、対象地域は東京都調布市とその周辺である。対象地域の選定は調査の実現可能性を最優先に考慮して決定した。第1図は今回の対象フィールドを示す。円内が、半径5キロ圏を示すため、原田（2014）に従えば、円内がインフォーマントの日常生活圏である。円内の主な消費地として、JR線三鷹駅・吉祥寺駅周辺、そして京王線調布駅周辺が挙げられる。聞き取りにより、よく出かける場所トップ3がほぼ全員「吉祥寺」「調布」「新宿」<sup>7</sup>であったことから、この対象フィールドは調査対象者の生活圏として少なからず的を射ていると考える。

今回の調査では、インフォーマントへの調査依頼にあたり調査者の個人的なネットワークを駆使

<sup>6</sup> エスノグラフィーとは「日本では『民族誌』と訳され、未開民族や特定の地域社会などの文化や社会経済組織をはじめとする生活様式について、フィールド調査を通して組織的に描き出す方法およびその成果として書かれるモノグラフや報告をさす」（佐藤 1984：i 頁）。

<sup>7</sup> 新宿駅までは、調布駅からは約15分で行かれるため、中学時代から遊び場として活用していた。ちなみに、出身中学の学区域は南北に長く伸びており、北部では「三鷹駅」が頻繁に使用する駅で、南部では「柴崎駅」がそれにあたる。

したため、インフォーマントの属性に偏りがある。そのため、調査結果の普遍性は低い。しかし、従来の研究よりも徹底した参与観察が可能なため、質的データとして十分に価値のある情報を得られた。

調査方法は主に次の3点である。1つ目は参与観察調査である。この調査では、余暇活動を共に過ごしているグループに加わり、2016年9月15日から12月15日までの3ヶ月間、行動を共にしながら生活実態の観察を試みた。参与観察調査は生きた文化を記録するための手法であり、調査者が当たり前と思っている習慣、振る舞いに潜在する特異な生活様式を見逃さないことを特に意識し、調査を行った。このグループに関する説明は、第4章で詳しく行う。2つ目は非構造的な聞き取り調査である。参与観察調査で拾いきれない家族との関係や労働環境などをこの方法で扱った。また、参与観察対象以外の対象者にも、丁寧な聞き取りを行った。対象者人数は22名で、調査期間は参与観察調査と同様である。3つ目は生活実態調査である。この調査ではインフォーマントの生活時間と行動特性を把握するためにインフォーマントの生活記録を1時間おきに記入してもらった。期間は2016年9月1日から同年12月10日までの任意の1週間である。22名へ調査用紙を配布し、19名分を回収した。

## 2 職業からみた若者の生活実態

### (1) 職業形態別にみる就労実態

最終頁に掲載されている第1表はインフォーマントの概要を示す。就業地を確認すると、市内もしくは隣接市内で働くインフォーマントは22人中13名である。また、この中の10人が親と同居しており、彼らの大半がとび職や大工などの職人<sup>8</sup>や小売業、飲食業に従事するフリーターである。

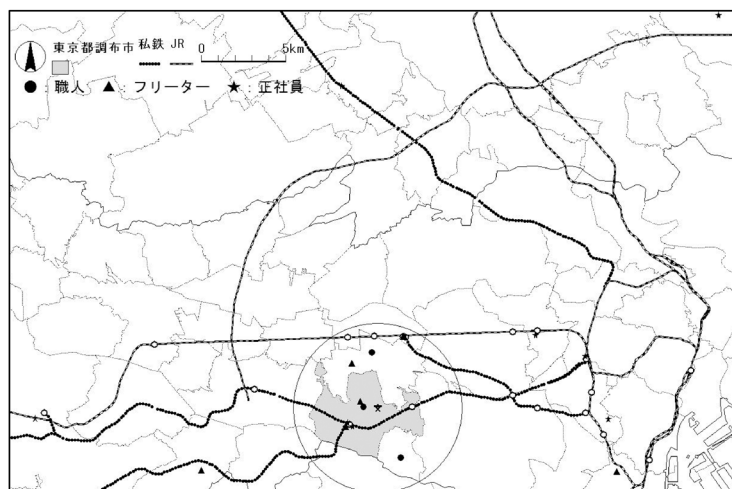
まず職人の就業地を地図で示す(第2図)。ここで示す就業地とは、現場ではなく事務所の位置である。この図から市内もしくは隣接市内に事務所が分布していることがわかる。サンプル数が少ないため傾向性を読み取ることは難しいが、この分布は、以後確認するフリーターや正社員と比べて狭域である。そして職人の親は「地元」出身の場合が多くその内2名は彼らと同様に自営業者である。そのため、彼らは「郊外二世帯」ではなく「地元の若者」に分類される。

ここではとび職に従事する「なかた」に注目し、職人の就労実態を確認する。「なかた」は高校卒業後すぐに、高校の就職斡旋で配管工の職に就いた。しかし、月13万円という仕事内容に見合わない給料への不満から半年でその職場を辞めてしまう。その後、中学校時代の友人の紹介で、友人の兄が経営するエアコンを設置する仕事に就いた。そこでの給料は20万円と前回に比べて高かったが、就労環境が厳しく、朝6時から深夜0時までという長い就労時間と重い機材を搬入する過酷な肉体労働に耐えられずに、その職場も1年で辞めてしまう。その後、職を転々とし、趣味

---

<sup>8</sup> 本稿における「職人」とは、就業者が事業主であり、一般的に親方と称される専門的な技術の伝承や仕事の斡旋、事務所の経営を行う事業者と就業上の契約を交わしている者を指す。具体的な職としてこの研究ではとび職と大工が挙げられる。

第2図 就業形態別就業地の分布（筆者作成）



\*図に描かれた円は調査対象者出身中学校を中心とした、半径5キロの円。  
第3, 4, 5図も同様。

で通っていた地元フットサルクラブのメンバーからの紹介で、現職であるとび職に辿り着く。従業員は親方と「なかた」の二人だけで、息子のように可愛がられているという。週6日間働き、休日にはフットサルの他にも親方と二人で稲城市にある公園に出かけスケートボードを楽しむ。月収は40万円で高額な給料は彼の誇りである。家から1キロ程離れた事務所へは毎日自動車通勤する。現職は今までの仕事場とは違い、人間関係が良好だと語る。しかし、とび職という危険な就労環境には不安がある。今年の4月には職場での事故で腕を骨折し、働けなくなった。現場復帰するまでの間、収入が激減した。収入の穴埋めをするため、職場には秘密で中学時代の友人が働く吉祥寺の飲食店で客引きとして働き、収入を得ていた。今後とび職を続けるつもりはなく、30歳までに独立し、とび職の仕事へ理解のある建築家になることを夢見る。

フリーターの就業地分布は正社員と比べれば狭い。通勤手段はオートバイ、バス、自転車と様々である。週に5日から6日間働き、他のアルバイトを掛け持ちしている場合もある。就労時間帯は、深夜勤務から早朝勤務まで多様である。手取り収入は月20万円前後が多く、正社員とあまり変わらない。職場での人間関係はたいてい希薄である。また、親は地方出身、「地元」出身それぞれおり、「郊外第二世代」と「地元の若者」が混在する。ここでは、吉祥寺駅周辺の雀荘でウエイトレスとして働く「おりの」に注目し、フリーターの就労実態を確認する。

「おりの」は大学中退後、都内のお笑いタレント養成学校へ中学時代の友人と入学した。しかしその友人が早々にやめてしまったことや、就職できずに苦しむ先輩たちの姿を見て、1年で養成学校を退学した。その後、声優を目指し、声優の養成学校へ入学、卒業したが、声優としての職は見つけられず、現在は再びお笑いタレントを志している。このように所属を転々としている間、アルバイトもしていた。初めてのアルバイトは高校入学時に始めた家から徒歩5分の距離にあるコン

ビニエンスストアである。その後、調布駅近くの弁当屋を経て、現在の吉祥寺にある雀荘でウエイトレスとしてアルバイトをしている。今までのアルバイト先は全て「インターネット」を用いて探した。仕事を決める際に考慮することは、業務内容と実家からの通勤時間である。現職を選んだ理由は、吉祥寺という立地と、ウエイトレスという業種がお笑いタレントという人前に出る仕事の糧になると思ったからである。現職では週5日間働き、勤務日の半分は夜勤である。職場までは実家からバスで通勤している。職場での人間関係は希薄で、プライベートで会うことはほとんどない。現職はお笑いタレントになるまでの収入を確保するために行っており、今後続けていくつもりはなく、業務内容にも飽きてきたため転職を考えているという。

正社員の就業地は比較的分散している。地元で働く正社員の場合、求人媒体には知り合いの紹介などが含まれる。一方で、地元外で働く場合は、大学もしくは専門学校で就職活動を行い現職へ就職したことが多い。彼らの親には地方出身者が比較的多く、「郊外第二世代」の若者が多い。ここでは、地元の保険会社で就職した「ななこ」と地元外でファッションデザイナーとして働く「わたや」に注目し、正社員の就労実態を確認する。

「ななこ」は都内の私立中堅大学を2年で中退し、母親の働く調布駅近くの保険会社に就職した。職選びの決め手は母親の斡旋である。月収は20万円前後で平日朝9時から夜の8時頃まで働く。通勤手段は自転車であり、家から30分程度で職場に到着する。特にやりたい仕事ではないためやりがいは感じず、転職を真剣に考えている。職場での人間関係は母親の影響で良好ではあるが、プライベートではなかなか打ち解けられないと話す。終業後には、母親と一緒にその日の夕食の食材を購入し、帰宅する。地元での就職の利点は、平日の仕事終わりに地元にいる友人と会えることだという。中学時代の友人や、近所に住む知り合いといつでも会える環境が彼女の支えとなっている。

「わたや」は大学を2年で中退し、被服系の専門学校に入学した。そこを2年で卒業し、インターンをしていた職場で婦人服のデザイナーとして働く。現在3年目で、給料は月17万円である。比較的少ない給料であるが、やりたい仕事に就いているため、満足だと語る。仕事は平日の10時から20時までと規定されているものの、自分のデザインを考え、デッサンする時間を確保するために、大抵夜22時までは会社に残り、休日も仕事していると語る。業務内容は、デザイン、デッサンの清書や各種雑務などである。職場での人間関係は良好で、特に社長と気が合うという。仕事終わりには社長をはじめ職場の人と職場近くの居酒屋へ行くことが多い。今の職場で自分のブランドの方向性を確立するまでは、働き続けると語る。

## (2) 既存研究との照応・考察

求人媒体について、職人の「なかた」は「知人からの紹介」、フリーターの「おりの」は「インターネット」<sup>9)</sup>、地元の正社員「ななこ」は親の斡旋、都心へ勤める正社員の「わたや」は学校のインターンという方法で職を見つけている。また、第1表から全体的に「知人からの紹介」や「イ

ンターネット」が主流な求人媒体として使われていることがわかる。実家の近くで職を見つけるプロセスとしては、「タウンページ」などの地域限定求人誌や店内広告などの空間的制約を持った求人情報が主流として示されており、(木下 2006, 稲垣 2005), その見解とは多少異なる結果となった。

また「知人からの紹介」はそのほとんどが親同士, もしくは青年団や地域サークル, 中学生時代の先輩後輩といった地元のインフォーマルな人間関係の中で生まれる求人方法であり, 特に職人の場合は顕著である。

業種へ注目すると, 「郊外第二世代」は完結した郊外空間において非正規という雇用形態をとりながらサービス業へ従事する傾向を持つとされる(稲垣 2002)。地方都市でも同様の傾向があり, 阿部(2013)は地方都市においてサービス業に従事する若者の仕事に対する意識の高さを示した。しかし, 今回の研究においては, フリーターや地元で働く正社員のサービス業に対する意識の低さが確認できる。また, 職人は業務内容ではなく, 高額な給与にやりがいを見出している。この背景には, 職業選択に際し業務内容以外の要因を優先事項として高く評価したことが挙げられる。彼らの職業選択の判断要因は居住地からの通勤利便性や地元の「つながり」であった。このような, 業務内容以外を職業選択の優先事項とした結果, 仕事内容自体に「やりがい」を見出せず, 業務への意識が低下するのだと考える。また, 就労意識の低下は職場での人間関係にも影響を与える。特にフリーターの場合は希望する就職への「つながり」として自らの現職を位置づけていることが多く, 濃密な人間関係を形成すると, 仕事を辞めづらくなることが懸念されるため, 職場での人間関係が希薄である。一方, 正社員で地元外の就業地に通勤している若者は自らの仕事に「やりがい」を十分に感じ, 仕事中心の生活を営んでいる。その背景には彼らが職業選択の判断要因として, 収入や通勤利便性, 地元での交友関係よりも仕事内容を優先したことが挙げられる。

以上のことを整理すると, 職人の場合親が地元出身者で自営業を営んでいることを背景に, 地元の人間関係を駆使して職を見つけるため, 就業地が地元へ集中する。彼らは高額な給与を手にすることにやりがいを感じている。フリーターは自分のやりたい職業に就くまでの準備期間という姿勢で働くことを望んでいるため, 実家から通いやすい職場を「インターネット」を用いて探索し, 希薄な人間関係の中でいつでも辞められるような就業意識で働く。正社員の場合, 地元で働くのは地元の人間関係を志向した結果であるため, 就労意識は低い。地元外で働く正社員は大学時代の就職活動やインターンなどの経験を踏まえて, 自分の就きたい仕事を選択し現職に就いているため, 現在の仕事にやりがいを感じており, 職場での人間関係も良好である。

---

<sup>9</sup> 一括りに「インターネット」と記載しているが, その内実は, 4年生大学卒業者が大手人材会社の Web サイトから新卒向け求人情報を検索していた一方で, 大学中退者や高卒者は地域密着型求人情報誌の Web サイトなどを使用しており, 志向する求人情報の質的な違いが伺える。



### 3 親の出身地からみた若者の生活実態

#### (1) 親の出身地と親との関係

第1表の親の出身地をみると、傾向として父親が調布市もしくはその近隣市区出身の場合が多く、地方出身者は少数である。一方母親は近隣市区以外にも東京都東部や北関東、さらには東北出身者も確認でき、父親に比べ出身地が分散している。ここでは、親が地元出身者の「地元の若者」と両親が地方出身者である「郊外第二世代」に分けて両親との関係や地元での人間関係について記述する。

「地元の若者」の場合、中学時代の友人を実家に呼び家族ぐるみの付き合いをしている者もあり、地元での人間関係は濃い。また、一部の親は自営業を営んでおり、その子供である彼らは地域の消防団や青年団への加入を将来的に検討している。例えば「ゆきや」の場合、彼の両親は地元出身で、二人はお見合いで知り合った。当時父は祖父の経営する銭湯で働いており、出会いが少なかった。現在その銭湯は長男である兄が継いでいる。次男である「ゆきや」も銭湯を継ぎたかったが、経営難で従業員を増やす余裕がなく他で職を探している。兄は、昔消防団員として活躍していた父親の影響や消防団の仲間がよく銭湯を利用していたことから、地域の消防団へ加入した。顔見知りの団員も多いという。「ゆきや」も同様に消防団へ興味があるが、まだ加入に踏み切れていない。家族との仲は良く、妹と母と三人でよく雑談しているという。また、「ゆきや」は昨年他界した祖父を晩年献身的に介護した。親との仲も良く、家事全般や食事は母親に任せている。家業が人手不足の時はそちらでも働き、多少の収入を得る。一方で進路や身の振り方の話をする機会は少ない。両親は「ゆきや」の生き方を尊重し、特に口を出さないという。「ゆきや」は大学<sup>10</sup>を1年で中退し、以後フリーターとして職を転々とした。その時も親と真剣に人生設計について相談することはなく、いつもと同じように実家で暮らしていた。このような突然の退学などを経験しても親子関係は悪化しなかった。「ゆきや」の心境としては両親への後ろめたさがあり、親から自立を促されないように振舞うため、敢えて人生設計の話には触れないようにしている。自立への意欲は薄く、金銭的に十分な余裕ができるまでは実家で暮らし、自立しても親との近居を望む。

「おりの」の場合、彼女の父は調布市出身、母は板橋区出身で、都内の一流企業へ勤める父と中小企業で配達業務をしていた母は父の仕事先で知り合った。現在母は会社を辞めて近くのスーパーでパートとして働く。母は地域活動にも積極的で、PTAの役員なども行っていた。小学生時代には、母親に連れられ母の友人が参加していた地域の室内ホッケーサークルに加入し、そこで得た人間関係は現在まで続く。「おりの」は高校卒業後、演劇の道を志し都内の演劇を学べる大学へ入学したが、自分の志していた方向性と授業内容が一致しなかったため、2年で退学した。その後中学生時代の友人と漫才師の道を志し養成学校に入ったり、声優を目指したりと所属を転々としてい

<sup>10</sup> インフォーマントの通う4年制大学には「全入制」の大学が多く含まれている。「ゆきや」の進学した大学も全入制である。

る。親には自分の人生設計についてほとんど相談しておらず、身の振り方が自分の中で決定した後、事後報告するのが通常である。親はこのような「おりの」の姿勢に寛容で、自分の道を歩ませてくれる。また、「おりの」は家事を基本的に母に任せている。夜勤明けで疲れているときに食事が用意されていると実家の有難さを感じる。そしてそのような居心地の良い実家を出る必要を全く感じていない。「おりの」には兄がおり、彼は現在福岡市でコールセンターに勤めている。アルバイトが忙しいため、特に家族全員で出かけたりはしないが、福岡で働いている兄を空港へ向かいに行くときは家族全員でドライブする。

両親が地方出身である「郊外第二世代」の場合、地元での人間関係は希薄である。「おっくん」の場合、両親は共に滋賀県出身である。両親はサラリーマンと専業主婦で、地域のお祭りや集会などへもあまり顔を出さない。老後は故郷である滋賀県へ引っ越す予定である。両親の馴れ初めなどプライベートな事に関して両親に尋ねたことはない。「おっくん」は小学2年生の時に滋賀県から調布市へ移住した。中学生時代からサッカーのクラブチームに所属し、そのころから地元の友人たちと遊ぶことが少なくなった。スポーツ推薦で大学に進学し、卒業後はサッカーのクラブチームのコーチとして働いていた。しかし、そこは1年で辞め、職を転々とした。現在は農業に興味を持ち、商品の流通を学ぶために品川区の八百屋で働いている。夢は農業とサッカーを掛け合わせたビジネスを成功させることである。このような勤め先の変遷を親にはほとんど話していない。話したとしても後日談として語る程度である。親が人生設計に助言する場合はほとんどなく、自分のやりたいことを第一に優先してくれる。食事などは基本的に外食が多く、家族そろって食べることはほぼない。基本的に両親とはコミュニケーションがないという。また、一人暮らしを切に希望しており、そのために現在資金を貯めている。

## (2) 既存研究との照応・考察

実家暮らしという選択はニューマン（2012）が指摘するように、若者にとって経済的に合理的な判断と捉えられる。実家という空間で生活する間は、一人暮らしをする場合に必要となる家賃や食費などの経費を抑えることができるため、実家は自立のための準備をするのに適した空間といえる。特に「おっくん」のような「郊外第二世代」の場合は、親子の情緒的な連帯というよりも経済的な目的を志向して実家で暮らしている傾向にある。一方、「地元の若者」はもちろん経済的な目的もあるが、そもそもあまり実家を出て自立したいとは思っていない。これは原田（2014）が指摘する低い上昇志向という「マイルドヤンキー」の特徴と通底する。もちろん彼らも金銭的な豊かさを志向するが、それよりも友人関係に代表される地元での情緒的な連帯を優先するため、彼らは一人暮らしをすることよりも、地元で生活し続けることを望む。そのため彼らの中には、実家近くで一人暮らしする若者もいる。

また、上記の事例それぞれに共通する点として、親の放任主義的な子育て戦略が挙げられる。「放任主義」とは、親が子の進路に対して「無関心」という意味ではなく、子供には「夢を実現し

てほしい」という親の教育方針のことである。つまり、親は子供が自分の夢を実現させるための準備期間として実家という空間を提供する。親の立場に注目すれば米村（2010）や稲垣（2003）が指摘するような、子供をあえて自立へと促さない親の姿が伺える。それは、子供に夢を実現させるためという名目で子離れを拒む親の姿であり、このような親の姿勢は彼らをフリーターへと導くとの見解もあり（小杉・堀 2002）、これが放任主義的子育て戦略の正体とも考えられる。この見解は本研究の対象者においても認められ、「おりの」や「おっくん」などはそれに当たる。また、親が自営業者である場合、特にこの傾向が強く、仕事を継ぐという最後のセーフティーネットが若者の自立意識と子供の将来に対する親の不安を軽減させる。

以上整理するれば、まず地元における人間関係に注目すると親世代からの影響が確認できる。「地元の若者」の場合、親がすでに豊かな人間関係を築いている場合が多く、その影響で地元における人間関係が豊かになる。たとえば「ゆきや」は父の所属していた消防団の団員と顔見知りになっており、また「おりの」は母に連れられて参加した室内ホッケーサークルで幼馴染を見つけた。彼らが実家に留まる理由はもちろん経済的な援助もあるが、むしろ地元における「つながり」を志向した結果である。一方で「郊外第二世代」の「おっくん」は親からの影響による地域での人間関係は形成できていない。彼は経済的な目的で実家に留まる。そして、それぞれの親の子育て姿勢には放任主義という共通点が存在し、それは子離れがなかなかできない親の姿とも解釈でき、特に自営業の親にはその傾向が顕著である。

#### 4 余暇活動からみた若者の生活実態

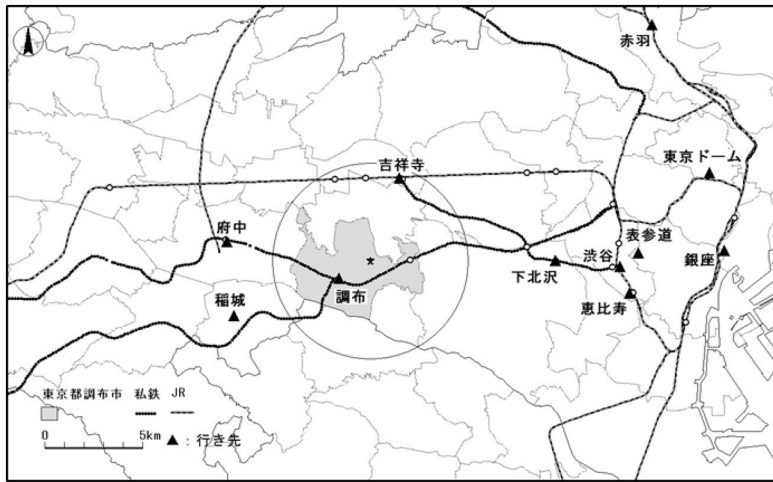
##### (1) グループ別にみる若者の余暇活動

インフォーマントを余暇活動の観点で見ると、3グループに分類できる。まずは、参与観察調査を行ったグループ A である。グループ A は中学時代からの友人関係を中心として構成された集団であり、原田（2014）で示される「マイルドヤンキー」の「強面」な雰囲気がこの集団でも確認できる。彼らの中に職人が2人含まれることや、メンバーの通勤圏が比較的狭い点も、このグループの特徴である。メンバーはインフォーマントの「なかた」「ゆうや」「ゆきや」「いなだ」「やまだ」の5人と彼らの高校生時代の友人数名である。このメンバーは「やまだ」以外、「地元」出身の親を持ち、このグループは「地元の若者」としての純度が高い。

次に、就業地が地元でグループ A 以外の若者集団である。就業地の近さは半径10キロ圏内とし、このグループをグループ B とする。このグループの女性に限っては中学生時代からの友人関係を継続しており「あき」の家を中心に行動している。このグループはグループ A と異なり「郊外第二世代」と「地元の若者」とが混合して構成される。

最後に、その他のグループであり、これをグループ C とする。彼らの特徴は、就業地が居住地から比較的遠いことや、余暇を1人もしくは中学生時代以外の友人と頻繁に過ごす点である。このメンバーの親には比較的地方出身者が多く、このグループは3つの中で最も「郊外第二世代」

第3図 グループAのある1ヶ月間休日の行動圏（筆者作成）



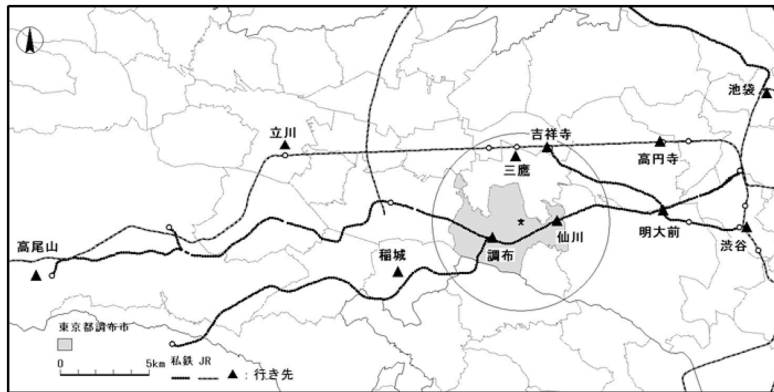
\*最近の1ヶ月で記憶に残っている外出先の聞き取り結果で、都内のものをプロットし作成。図4、5も同様。

としての純度が高い。

グループ別に余暇活動の実態を確認すると、グループAは平日の余暇活動の特徴として、終業後の即興的な時間消費型余暇行動が挙げられる。彼らは終業後の夜遅い時間帯に「いつもの」場所に集まりたむろすることで明日の英気を養う。一方休日の余暇活動に関して第3図を確認すると、彼らはもちろん吉祥寺や下北沢、府中の駅前や稲城中央公園などの地元でも余暇を過ごす、赤羽の飲み屋街や原宿、恵比寿、渋谷などのファッションストリートや東京ドームシティといったアミューズメントパーク、さらには銀座などの都心でも余暇を過ごす。ここでは、「なかた」に注目しグループAの余暇活動を確認する。

「なかた」は週に1度の休日を「ゆうや」や「ゆうや」の彼女と都心で過ごすことが多い。もちろん職場の親方とスケートボードなどを楽しむこともあるが、それは稀な半日休暇や平日休暇を利用する。休日の余暇活動は上記した即興的な集まりとは異なり、時には数週間前から計画する。行き先は渋谷、原宿、青山などのファッションストリートが多く、都心へ出かける際には父親の車を借りる。彼らが電車を利用することは極めて稀である。都心では、主に高級ブランド品の衣類や雑貨を購入し消費活動を満喫する。時には数万円する衣類品を数着購入することもある。月に10万円以上は都心での買い物に費やし、金銭的な余裕がない場合はクレジットカードを使うこともある。買い物に関しては欲しいものを手に入れる主義である。また、夜は盛り場のクラブで遊ぶこともある。都心へ出かける理由は、地元では手に入らないものが手に入るからである。彼の1ヶ月の給与は40万円前後で、消費内訳は携帯電話料金が1万3千円、保険代が5万円、クレジットカード支払いが5万円、食費が6万円、その他はすべて休日での買い物に費やし、貯金は一切無い。他にも「なかた」のように高級ブランド品を身に着けているメンバーが非常に多く、これはグ

第4図 グループBのある1ヶ月間の休日行動圏（筆者作成）



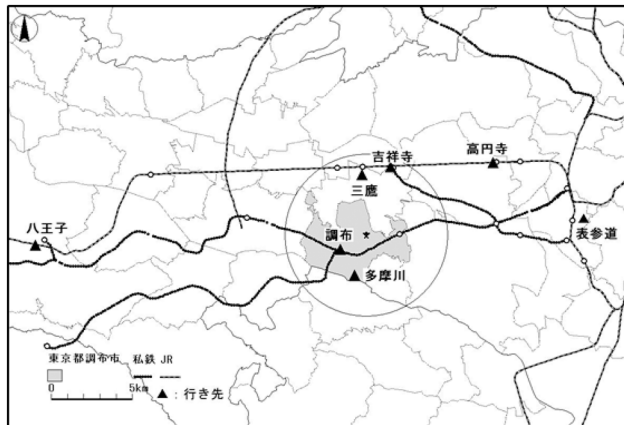
ループA全体の特徴とも推測できる。

グループBの平日の余暇活動にも、前述した即興的な集まりが確認できる。しかし、グループAのような休日に都心へ出かけてブランド品を買い漁る行動はほとんどなく、吉祥寺や三鷹などの地元で過ごすことが多い。都心へ出かける際は京王線を使用する場合が多く、京王井の頭線と京王本線とが接続する明大前駅や新宿、渋谷での余暇活動が確認できた。そして池袋、高円寺などの都心西部への移動や、高尾山や稲城市にある健康ランドでのレジャーも確認できた（第4図）。

ここでは、「ななこ」に注目しグループBの余暇活動を確認する。家から自転車で20分の調布駅前へ通勤する「ななこ」は就業後に「みゆ」や「あき」と頻繁に集まる。集合時間は20時頃が多く、特に最近では第二子が誕生した「あき」の家へよく遊びに行く。そこでは子供の世話や、録り溜めたテレビドラマの鑑賞をする。「あき」が子供を寝かしつけた後は、お酒を飲みながら雑談し、深夜に帰宅する。一方、休日は出身小学校で毎週開かれる趣味の室内ホッケーや、中学時代の友人と吉祥寺周辺でショッピングを楽しむ。家族で出かけることもあり、先日は家族全員を自動車に乗せて立川の総合ディスカウントショップへ買い物に出かけた。趣味の室内ホッケーには特に力を注いでおり、大抵の休日は大会への出場や練習などに費やされる。この同好会には「ななこ」と同じ小中学校の友人たちが多数在籍しており、活動の無い休日でも彼らと頻繁に行動を共にする。行先はディズニーランドや複合アミューズメント施設「ラウンドワン」などで、移動手段は主に自動車である。仕事先の人と休日に会うことはほとんど無く、プライベートでは距離を置く主義だという。

グループCは就業後、直ぐに帰宅するか会社の同僚と勤め先付近で飲みに出かける。休日は三鷹、吉祥寺周辺や多摩川の河川敷などの地元でゆっくりと時間を過ごす（第5図）。しかし、この図には掲載されていないが、彼女と新潟県の温泉地へ旅行に出かけたり、大学時代の友人と山梨県にある遊園地「富士急ハイランド」へレジャーを楽しむなど、行動圏は広い。また、休日であっても会社近くの喫茶店で同僚と仕事の打ち合わせや、家で資格の勉強など、仕事の準備期間に休日を当てている印象が強く、仕事中心の生活実態が伺える。ここでは「わたや」に注目する。

第5図 グループCのある1ヶ月間の休日行動圏（筆者作成）



デザイナーとして働く「わたや」は大抵22時近くまで渋谷駅近くの職場で働き、どこにも寄らず帰宅する。終業時間が早い日は、仲の良い上司と恵比寿の居酒屋へ飲みに出かけファッションの話や現在考えているデザインの話などで盛り上がる。支払いは上司がすべて済ますという。一方で休日は、自分の部屋でデザイン研究や服作りをする。外出は、自転車で近くの公園へ散歩に出かける程度で留まり、地元の知り合いと会うことはほとんど無い。しかし、専門学校時代の友人とは稀に会い、青山などで最新のファッションを眺めながら、久しぶりの再会を楽しむ。家族でどこかに出かけることはほぼ無く、両親や妹とはほとんど口を利かない。

## (2) 既存研究との照応・考察

インフォーマントの余暇活動を原田（2014）と照応すれば、グループA、Bに見られた即興的な集まりは、彼が主張する半径5キロ圏内生活圏を背景とした特性である。この即興的な集まりに関しては、第4章で詳しく考察する。グループCの場合は終業後どこにも寄らず帰宅するか、勤め先の人と近くの飲み屋へ行くことが多く、彼らの生活圏は半径5キロ圏内というよりも、むしろ自宅と職場付近で完結する。

休日の余暇活動に関して、グループAは地元には留まらず都心まで行動範囲を広げる。この行動は休日の余暇活動であるため、日常的な生活圏を指す原田の半径5キロ圏内生活圏説への反例として扱うことは難しい。一方彼らの都心における消費活動は原田の示す「マイルドヤンキー」的な消費活動と一致する。原田は「マイルドヤンキー」の特徴として仲間意識を高揚させるような「コト」への旺盛な消費意欲を挙げる。今回の研究では、グループAメンバーの都心における高級ブランド品への消費活動がそれに当たる。それは彼らが高級ブランド品という「モノ」ではなく、それをメンバーで身に着ける「コト」を志向し消費活動を行っていると推測できるからである。グループのメンバー全員が地元では買えない高級ブランド品を身にまとうことで、高級ブランド品が彼

らのチームユニホームとして機能し、グループの統一性、つまり情緒的連帯を高めるのである。今回の研究ではこの現象をブランド品のユニフォーム化と称す。この現象は参与観察調査を通じて得た体験からも裏付けられる。

調査者が参与観察でグループへ接近した際、まず初めに指摘されたことが、その時の服装についてであった。調査者が身に着けていた洋服はいわゆるファストファッションブランドのものであり、グループのメンバーから「ダサイ」と非難された。このように、彼らは外見にこだわりを持つ。このこだわりは情緒的連帯を執拗なまでに重視する彼らの生き方の表象であるとも推測できる。さらに言えば、高級ブランド品を身にまとう行為は反学校文化の影響と考えられる。あたかも学生時代に学生服を着崩すという反学校文化的行為が仲間内の徴として機能していたように、彼らは仲間意識を保つために高級ブランド品を身に着ける。現にグループAのメンバーは中学生時代に制服を着崩していた。また、彼らが学生時代に制服を着崩した目的は校内で目立つことであり、それは校内で目立つことが許可されるだけの人間関係を持つことの誇示でもある。ここでの人間関係とは主に反学校文化を先導する上級生との関係である。卒業後もこのような上級生との関係が継続していることを踏まえると、ブランド品のユニフォーム化が誇示する人間関係は、阿部（2011）の示すような、現代は解体されつつある「族」的な関係であるとも考えられる。つまり彼らは高級ブランド品を身に付け地元を「大きな顔」で闊歩することで、地元における「族」的な集団との関係を誇示する。そして、そのような人間関係は彼らを地元の人間として承認し、結果的に彼らの地元に対する帰属意識を高める。これらを踏まえれば、ブランド品のユニフォーム化は集団内と地元という二つの空間を居場所として志向する彼らの生き方の指標とみなすことができる。

移動手段に注目すると、グループAの場合、自動車が主要な移動手段であった。自動車は終業後の即興的な集まりや休日の都会への移動の両方で使用される。また、グループBも地元周辺では自動車を頻繁に使用する。しかし、稀に都心へ出かける際には、必ず電車を使用する。その理由には都会は自動車で行動しづらそうだからという印象的なものが多い。グループCの場合、休日にも自転車と電車を主要な移動手段として使用する。3グループにおいて自動車の使用頻度に大きな差があるが、これは主とする生活範囲の違いによる影響が考えられる。グループA、Bは、主に地元の友人とどこかに赴くための手段として自動車を使用するが、それは遠くへ出かけることを目的とするのではなく、むしろ地元に住む友人を迎えに行く、あるいは送り届ける手段として用いられる。このように自動車利用は地元に住む友人と現在でも交流があることを前提とするため、交流の少ないグループCは、自動車を必要とする機会自体がそもそも少ない。またグループCの場合、休日であっても仕事関連の事柄に着手している場合が多く、そもそも外出をあまりしない。それは、グループCの生活の中心が地元ではなく職場だからである。このような地元における交友関係や生活空間の違いが自動車の使用頻度の違いを生むのだと推測する。

以上のことを整理すると、グループAは終業後即興的にいつもの場所へ集まり、時間的消費活動を行う。休日は都会へ出て「マイルドヤンキー」的である派手な消費活動を満喫する。その消費

活動はブランド品のユニフォーム化に代表され、集団内、そして地元における居場所の確認という意味があった。グループ B も終業後即興的に集まるが、休日は都会へ出ることなく趣味や地元の消費空間で中学生時代からの友人たちと一日を過ごす。グループ A、B が多用する移動手段は自動車であり、その背景には複数の地元友人たちと過ごす休日のライフスタイルがある。グループ C の場合、就業後どこかへ出かけることはほぼ無く、休日は仕事の準備や近場で 1 人の時間を過ごすか、または大学時代の友人や彼女と計画的に旅行や観光を楽しむ。

## 5 「場めん」の実態

### (1) 「場めん」に集まるグループ A

上記したグループ A、B の即興的な集まりのことをグループ内では、『「場めん」で集まる』という。このセンテンスは、「その場にいるメンバー」と「そのときの雰囲気」という 2 種類の意味を持ち、前者の場合は「場メン」、後者は「場面」と表記される。使用方法としては、「場メン（その場にいるメンバーで）で遊びに行く」「場面（その時の雰囲気で）で集まる」のような使い方をする。両者の共通点は無計画性と即興性である。無計画に「いつもの場所」で集まり、何をするでもなく時間を消費する。このような行動習慣を本研究では「場めん」習慣と称す。

グループ A の「場めん」習慣に注目し、その具体的な活動内容を確認する。グループ A は、より大きなグループの一角にすぎず、母体となるグループは、中学生時代の友人関係に高校の友人関係が加わることで形成された。三鷹市にある私立高校では中学生時代からの仲である「ゆきや」「ゆうや」「いなだ」などのグループに他の中学校出身者が加入し大きなグループが形成された。そのグループでは地元の友人を紹介する習慣が生まれ、その高校の生徒以外にもグループの輪が広がった。このように友達の友達が友達になる過程を経てグループが拡大した。グループ全体で集まる際の集合場所は吉祥寺で、高校が吉祥寺に近く、かつメンバーそれぞれの地元の中間点に吉祥寺が位置していることが理由である

グループが最も拡大したのは高校 3 年から大学 1 年の時期である。この時期には車やバイクで集団を作り、ドライブを楽しんだ。また、各々の地元の繁華街へ赴き、朝まで飲酒を楽しんだり、「スポッチャ」「ラウンドワン」に代表される総合アミューズメント施設でボーリングを 20 ゲームするなど、かなり無茶な遊びをした。その後、各メンバーが就職活動や仕事で忙しくなるにつれて、居住地の近いメンバーで頻繁に集まるようになり、グループが再編成された。現在は、上記のように、再編成されたメンバーたちで週 2 回から 3 回集まる程度である。

頻繁に会えなくなったメンバーが顔を合わせる機会として、メンバーの誕生日会がある。開催地は吉祥寺で、中心のメンバー 10 名程度が集まり誕生日を祝う。誕生日会では平均 3～4 軒の居酒屋、カラオケを巡り、気分が乗るとキャバクラにも行く。会計の支払いは、そのとき金銭的に都合のつくメンバーが払うことが多く、早々に潰れてしまう「ゆきや」などは、お金を払った覚えがありませんという。この点は新谷（2007）が示す「地元つながり文化」の特徴と一致している。誕



生日会ではプレゼントの贈呈がある。プレゼントは5万円以上する高価なものが多く、9月に行われた「ゆうや」の誕生日会では、10万円程度の有名ブランドの服が友人から送られたという。その日は居酒屋を3軒はしごした後、有志でキャバクラへ行き、キャバクラも3軒は回ったという。結果、最後まで残ったメンバーは一人10万円くらいの支払いである。このとき、泥酔した「ゆきや」の代金は誰かが代わりに支払ったという。代わりに支払った代金は金銭で後日返済するのではなく、同じような機会に遭遇した際、借りた方が多く払うという形式で返済する。金額に関して曖昧になるが、それよりも借りを返すという名目で友人と再会する「コト」を重視する。

このような非日常的な消費活動とは異なり、終業後の日常的な消費活動においてグループAの「場めん」習慣は確認できる。頻繁に集合できなくなったグループAは、近くに住むメンバーだけで深夜の時間帯に集合する。場所は調布駅に隣接する商店街にある「いなだ」のアルバイト先の焼肉屋で、21時ごろから1時ごろまで、何をするでもなく、グダグダとしている。「いなだ」「ゆきや」「やまだ」そして「いなだ」と同じ高校出身の「いなだ」の彼女が中心メンバーで、彼らは「いなだ」のバイトが終わる頃に現れ、賄い飯を食べ、動画配信サイトでお笑いの動画などを見て、「くだらない話」をして、帰宅する。帰宅は大抵深夜2時過ぎであり、彼らの中には「場めん」後の睡眠時間が3～4時間の者もある。「いなだ」自身はアルバイト先で寝泊りし、翌朝5時からの別のアルバイトに備える。他のメンバーは自動車で帰宅する。「ゆきや」の自動車を使うことが多く、彼はメンバーを送迎してから帰宅する。また、急遽友人を呼び出す際にも、自動車を使い友人を迎えに行く。自動車内では、大音量で「おなじみ」の歌謡曲を流し皆で熱唱する。

以上の「場めん」習慣の行動特徴を整理すると以下の3点が挙げられる。第1に活動が深夜の時間帯に及ぶことである。具体的には22時以降から深夜3時頃までが多い。第2に、自動車での移動である。「ゆきや」によれば、半径1キロ圏外は車で移動するという。自転車を使うことはほぼ無い。第3に即興性と無計画性である。もちろん彼らは予定を立てて遊びに行くこともある。その時に集まれるメンバーで、とりあえず集まり遊ぶ「場めん」習慣では、無計画で即興的に集まることが前提である。そのため、集合したにもかかわらず、することが特に無い場合が多い。たとえば「いなだ」は、「いなだ」の彼女や「なかた」と集まり、突然バーベキューがしたくなり、ドンキホーテへ買い出しへ出かけたが、バーベキュー用の買い物をしているときに気持ちが覚めてしまい、結局「いなだ」の家で何をするでもなく過ごしたと言う。

## (2) 既存研究との照応・考察

「場めん」のような行動様式を対象とした研究に新谷（2007）がある。この研究は東京大都市圏郊外の駅前で深夜の時間帯に集まる若者ダンスグループを取り上げており、彼らの行動習性を「地元つながり文化」として紹介している。「地元つながり文化」は、学校・家庭とは異なる場所の共有、予定を立てず集まる時間感覚の共有、金銭感覚及び金銭自体の共有、という3つの特徴で紹介されている。時間感覚の共有や金銭感覚及び金銭自体の共有は「場めん」習慣と類似している。

しかし、学校・家庭とは異なる場所の共有に関して、実家が集会の場所とは対極の関係にあるとされているが、今回の調査では、むしろ積極的に実家が集会の場所として活用されていた。その背景には、彼らと両親の仲が良いことが挙げられる。つまり既存研究のような、学校や家庭とは対照的な位置づけで「場めん」を語ることはできない。

以上を踏まえ「場めん」習慣の3つの特徴について考察する。まず、「場めん」習慣が深夜の時間帯に起こる理由には彼らの就労時間が関係する。彼らの就労形態は職人もしくはフリーターであり、職人の場合派遣された現場やその日の仕事内容により就労時間が大きく異なる。また、フリーターの場合も日によって就労時間が変化し、特に夜勤の場合などは就業時間が深夜や早朝となる。このような不安定な就労時間を前提にすると、彼らが集合できる時間帯はかなり限定される。この限定された時間帯の中で集まるために、深夜の時間帯が選ばれると考える。

次に移動手段として自動車を選ばれる理由を考える。「場めん」の終わる時間帯はバスなどの公共交通手段が終了しているため、自転車、バイク、自動車といった移動手段を用いる必要がある。これらの中から自動車を選択する理由は、移動手段を失った友人、または自動車、バイクで集合したにも関わらず飲酒した友人を家まで送迎できるからである。また、「場めん」であまりにも人が集まらない場合には、深夜にメンバーを家まで迎えに行くこともあるため、その際に自動車が必要となる。このように、「場めん」習慣と自動車利用の関係にも時間的条件が影響している。また、自動車による送迎は「貸し」「借り」に代表される地元の人間関係の指標としても機能している。原田（2014）によれば「マイルドヤンキー」はワゴンなどの大人数が乗車できる自動車を志向する。彼らがそのような自動車を志向する目的は友人を乗せられるからであり、これは前述した仲間意識を高揚させることへの旺盛な欲求の現れとされている。この原田の見解は今回の研究における自動車利用の考察に通底する。彼らは泥酔した友人を送迎することで仲間意識を向上させているのである。

最後に、なぜ無計画で即興的な行動をとるのか考察する。彼らは予定無しに集まれることを仲間意識の1つの指標として扱っている節がある。参与観察調査において、「場めん」で集合できないメンバーを彼らは「ノリ」<sup>11</sup>が悪いと非難していた。また、途中で帰ることも「ノリ」の悪い行為としてみなされる。このように「場めん」で集合しない、もしくは途中で帰るという行為は、メンバーからの評価を下げる行為であり、このような評価基準を考慮すれば、反対に「場めん」で集まれることは「ノリ」が良いと評価されることになる。さらに彼らは稀に、グループに一応所属しているが辞めるかどうか瀬戸際のメンバーをあえて「場めん」で呼び出し、そのメンバーの帰属意識を確認することがある。これらのことを勘案すると、「場めん」の無計画性、即興性にはグループの連帯意識を確認する機能があると推測できる。

---

<sup>11</sup>「ノリ」とはインフォーマントがよく使用する言葉で、その場の雰囲気との共感感覚などの事を指す。『ノリが合う』を「気が合う」と解しても支障はない。

## 6 結論

「マイルドヤンキー」とは「生まれ育った土地に根ざした同年代の友人たちと、そこで育まれてきた絆意識、家族と地域を基盤とした毎日の平凡な生活」（原田 2014：25）を志向する地元を出ない若者たちである。今回の研究において、彼らの志向する絆意識や毎日の平凡な生活は、グループ A によるブランド品のユニフォーム化と「場めん」習慣に象徴された。

以上 2 つの特徴的な行動をグループ A の生活構造の中で位置づける。グループ A は他のグループとは異なり、都心での消費活動を楽しむ。彼らは都心で高級ブランド品を購入しユニフォームのように身に着けることで、グループ内そして地元の人間関係において居場所を見つける。この派手な経済的消費活動は、実家で暮らしながら過酷な就労環境の下で高額な給与を得ることにより成り立つ。彼らは、実家で暮らすことで生活費や家賃による出費を抑えながら、収入は高いが過酷で不安定な労働条件の職に就き高額な給与を手にするすることで、ブランド品のユニフォーム化を実現させる。また彼らは時間的消費活動である「場めん」習慣において、深夜の時間帯に友人を突然呼び出して仲間意識を確認し合う。この習慣は地元の豊かな人間関係が前提となるため、「地元の若者」が混ざるグループ B には見られるが、地元の人間関係が希薄な「郊外第二世代」を中心とするグループ C には見られない。そして、この習慣は深夜の集合時間と自動車移動というメンバーの不安定な終業時間への工夫に特徴付けられる。これらの経済的、時間的消費活動はグループの情緒的連帯を強化し、メンバーそれぞれに帰属意識を喚起させ、現状の生活に対する安心感を与える。そして、彼らの生活基盤である実家には、子供の「やりたいこと」を最優先する放任主義的な子育て戦略の帰結として自立を意識する必要性を感じさせない空間が形成される。特に彼らの親たちが自営業者である場合、彼らの人生プランには職を失った際のセーフティーネットとして親の仕事を継ぐという選択肢が存在した。

最後に、これらの調査結果を踏まえ、グループ A の将来について考察する。轡田（2017）は、地方における地元暮らしの満足度を消費機会へのアクセシビリティとの関係から捉え、現在の地方都市における消費空間の発達を踏まえた上で、従来の若者論で扱われてきた都心－地方という 2 項対立とは異なる、地方中核拠点都市圏－条件不利地域圏という新たな 2 項対立の構図を提示した。この構図は消費機会への日常的なアクセス可能性を基準としており、条件不利地域圏を地方中核拠点都市圏におけるロードサイドショッピングモールなどへのアクセスも困難な地域として捉える。そして、このようなモビリティ格差に対するケアの必要性を轡田は主張する。

しかし、大都市圏郊外における地元暮らしの満足度の基準には消費機会へのアクセシビリティではなく、むしろ地元の人間関係の豊かさが妥当と考える。それは、大都市圏郊外において条件不利地域のような消費機会に恵まれない地域はほぼ存在せず、また実家の経済的基盤が地方よりも比較的安定している可能性が高いため、地元暮らしの満足度に対し経済的要因よりも絆や「つながり」といった存在論的な要因が重要になるからである。そして、地元の人間関係は若者が持つ人間関係

だけではなく、親世代の人間関係からの影響も受ける。したがって、親が地元で根差す「地元の若者」と親が地方出身の「郊外第二世代」とでは地元暮らしの満足度に差が生まれると推測する。

これらを踏まえ、「地元の若者」中心で構成されるグループ A の将来を考えれば、確かに風貌や職業、消費活動の表層のみを見れば将来的に厳しい経済状況を迎えることを予見させるが、濃厚な人間関係や地元地域への帰属意識などを考慮に入れば、決して貧しい生活を送っているわけではない。「郊外第二世代」に代表される都心で正社員として働く若者と比べれば、確かに現職の不安定性から経済面で不足した状況に陥るリスクもあるが、人間関係の豊かさなど生活の質における側面ではむしろ彼らのほうが豊かであるといってもよい。また、彼らのような「地元」志向の若者たちは、青年団や消防団といった地域組織や地域の祭事・イベントの担い手になる可能性を持つため、彼らが地元で暮らす意味は再認識されるべき貴重性を有している。

今回の研究は質的な調査を中心に行ったため、今後定量的な研究を必要とする。またインフォーマントに限りなく近づきながらも、それを対象として観察するという参与観察調査の難しさに直面した。調査者がグループに入ることでグループが変容したのである。たとえば、将来の話題に興味を示さなかった「なかた」がそれを心配する「いなだ」の話を聞くようになり、またグループから距離を置いていた「ゆうき」がグループに再加入した。これらの異変は、もちろん意図的な結果ではないが、調査者がインフォーマントへ少なからず影響を与えたために発生したと考えられる。それは同時に、インフォーマントのネットワークは、外部からの微細な刺激に影響を受けるような繊細な関係性であるとも解釈できる。このように今回の調査は客観的にインフォーマントを観察するという点では困難な調査であったが、インフォーマントグループの一員という視点からインフォーマントの生活実態を詳細に描き出した点で有意義であると考ええる。

#### 引用文献・参考

- 阿部真大 (2011)『居場所の社会学—生きづらさを超えて』日本経済新聞出版社
- 阿部真大 (2013)『地方にこもる若者たち—都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新書
- 新谷周平 (2002)「ストリートダンスからフリーターへ」『教育社会学研究』71 : 151-170
- 新谷周平 (2007)「ストリートダンスと地元つながり—若者はなぜストリートにいるのか—」本田由紀編『若者の労働と生活世界』大月書店 : 221-252
- 稲垣 稜 (2002)「1990年代以降の大都市圏郊外における若年者の就業行動—名古屋大都市圏及び高蔵寺ニュータウン居住者を例に」『経済地理学年報』48-2 : 23-43
- 稲垣 稜 (2003)「大都市圏郊外のニュータウン出身者の移動行動—高蔵寺ニュータウンを事例に」『地理学評論』76-8 : 574-598
- 稲垣 稜 (2005)「大都市圏郊外に立地するアルバイト求人行動と若年者の求人行動」『人文地理』57-1 : 25-46
- 稲垣 稜 (2011)『郊外世代と大都市圏』ナカニシヤ出版
- 太田聡一 (2005)「地域の中の若年雇用問題」『日本労働研究雑誌』539 : 17-33
- 川口太郎 (1990)「大都市圏の構造変化と郊外」『地域学研究』3 : 101-113
- 木下禮子 (2006)「カジュアルな就業者たち—高卒女性フリーターのジョブサーチ」『地理科学』61-3 : 44-51
- キャサリン ニューマン著、萩原久美子・桑島薫訳 (2012=2013)『親元暮らしという戦略—アコーディオンフ

- ファミリーの時代』岩波書店
- 轡田竜蔵（2011）「過剰包摂される地元志向の若者たち」樋口明彦・上村泰裕・平塚眞樹編『若者問題と教育・雇用・社会保障—東アジアと周辺から考える』法政大学出版：183-212
- 轡田竜蔵（2017）『地元暮らしの幸福と若者』勁草書房
- 小杉礼子・堀有喜衣（2002）「若者の労働市場の変化とフリーター」小杉礼子編『自由の代償/フリーター—現代若者の就業意識と行動—』日本労働研究機構：15-35
- 佐藤郁哉（1984）『暴走族のエスノグラフィー—モードの叛乱と文化の呪縛』新曜社
- 田中研之輔（2016）『都市に刻む軌跡—スケートボーダーのエスノグラフィー』新曜社
- 谷 謙二（2007）「人口移動と通勤流動から見た三大都市圏の変化—大正期から現在まで—」日本都市社会学会年報 25：23-36
- 富田和暁（1993）「大都市圏における第三次産業の立地動向」『地理科学』48：151-157
- 難波功士（2007）『族の系譜学 ユースサブカルチャーズの戦後史』青弓社
- 原田曜平（2014）『ヤンキー経済—消費の主役・新保守層の正体』幻冬舎新書
- 樋口美雄（2004）「地方の失業率上昇の裏に若者の地元定着増加あり」『週間ダイヤモンド』3月20日号：25
- 古郡頼子（1997）「産業の多様化と変化する雇用形態」『日本労働研究雑誌』39-8：29-38
- 米村千代（2010）「親との同居と自立意識—親子関係の『良さ』と葛藤」岩上真珠編『〈若者と親〉の社会学』青弓社：83-104

第1表：聞き取り対象者一覧（筆者作成）

仮名	性別	分類	学歴	就業 形態	就業地	業種	求人情報 の入手法	住まい	居住形態	月の可処 分所得	10年後 の職	父親の 出身地	母親の 出身地
ゆきや	男	A	4年制大学 中退	正規	新宿区	IT 関連	ネット	調布市	実家	20万	転職	調布市	杉並区
やまだ	男	A	4年生大学 中退	正規	調布市	営業	ネット	調布市	実家	30万	現職	北海道	岩手県
いなだ	男	A	4年制大学 卒業	非正規	調布市	飲食	紹介	調布市	実家	20万	現職	杉並区	杉並区
むらき	男	A	高校卒業	職人	調布市	大工	紹介	三鷹市	実家	30万	現職	武蔵野市	調布市
ゆうや	男	A	4年生大学 卒業	非正規	武蔵野市	飲食	紹介	調布市	実家	20万	転職	—	三鷹市
なかた	男	A	高校卒業	職人	調布市	とび職人	紹介	調布市	実家	40万	現職	三鷹市	立川市
あき	女	B	高校中退 (大検獲得)	非正規	三鷹市	販売	紹介	調布市	夫・ 子供2人	5万	転職	調布市	埼玉県
ゆうき	男	B	高校卒業	職人	狛江市	大工	ネット	調布市	実家	30万	現職	岩手県	三鷹市
かな	女	B	中学卒業	非正規	武蔵野市	ジュエリー 販売	ネット	三鷹市	1人 暮らし	20万	転職	長崎県	立川市
ななこ	女	B	高校卒業	学生	—	学生	—	調布市	実家	—	転職	—	—
おりの	女	B	大学中退・ 専門卒	非正規	武蔵野市	雀荘	ネット	調布市	実家	20万	転職	調布市	板橋区
ななこ	女	B	4年制大学 中退	正規	調布市	保険会社	紹介	調布市	実家	15万	転職	大田区	世田谷区
はこ	女	B	4年制大学 卒業	非正規	調布市	スポーツ トレーナー	紹介	調布市	実家	17万	現職	豊島区	埼玉県
ゆきや	男	B	専門卒	正規	埼玉県 越谷市	無線 LAN 営業	ネット	調布市	実家	20万	転職	三鷹市	長野県
さこ	女	B	4年制大学 卒業	正	調布市	旅行会社	ネット	調布市	実家	18万	転職	中野区	三鷹市
まっきー	男	B	高校卒業	学生	—	学生	—	調布市	実家	—	転職	八王子市	八王子市
みゆ	女	B	4年制大学 卒業	正規	中野区	銀行事務	ネット	調布市	実家	17万	転職	神奈川県	小平市
もっくん	男	B	4年制大学 卒業	正規	多摩市	児童館	紹介	調布市	実家	17万	転職	調布市	福島県
なみ	女	C	4年制大学 卒業	正規	八王子市	自動車 メイカー	ネット	調布市	実家	19万	現職	北海道	北海道
とうや	男	C	4年制大学 卒業	正規	埼玉県 朝霞市	自動車 エンジニア	ネット	調布市	実家	19万	現職	長崎県	墨田区
わたや	男	C	大学中退・ 専門卒	正規	渋谷区	デザイナー	紹介	調布市	実家	17万	現職	神奈川県	滋賀県
おっくん	男	C	4年制大学 卒業	非正規	品川区	八百屋	ネット	調布市	実家	15万	転職	滋賀県	三重県